

第4回 献血推進のあり方に関する検討会 議事次第

平成20年12月4日(木)
午前10時～12時30分
日本教育会館9F 喜山倶楽部「平安の間」

1. 開会
2. 「採血基準見直しの検討に係るワーキンググループ」の委員について
3. 社会や学校の環境変化に対応した献血推進方策について
4. 中間報告(案)について
5. 閉 会

資料一覧

- 資料 1 献血推進のあり方に関する検討会 委員名簿
- 資料 2 採血基準見直しの検討に係る「ワーキンググループ」の設置について(案)
- 資料 3 論点(案)
- 資料 4 年齢別献血者実数(年間献血回数別)及び年齢別人口グラフ【6都道府県抜粋】
- 資料 5 埼玉県における高校献血の実施状況

「献血推進のあり方に関する検討会」

委員名簿

	氏名	現職
1	飯沼 雅朗	社団法人日本医師会 常任理事
2	宇都木 伸	東海大学法科大学院実務法学研究科 教授
3	衛 藤 隆	東京大学大学院教育学研究科 教授
4	大平 勝美	社会福祉法人はばたき福祉事業団 理事長
5	掛川 裕通	日本赤十字社血液事業本部 副本部長
6	川内 敦文	高知県健康福祉部 医療薬務課長
7	河原 和夫	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 教授
○ 8	清水 勝	医療法人西城病院 理事
9	住友眞佐美	東京都福祉保健局 保健政策部長
10	田辺 善仁	株式会社エフエム大阪 専務取締役
11	中島 一格	東京都赤十字血液センター 所長
12	羽田真由香	全国学生献血推進協議会 委員長
13	花井 十伍	ネットワーク〈医療と人権〉 理事
14	堀田美枝子	埼玉県立浦和西高等学校 養護教諭
15	山本シュウ	株式会社アミューズ所属 ラジオDJ

○…座長

「採血基準見直しの検討に係るワーキンググループ」の設置について(案)

1 目的

「献血推進のあり方に関する検討会」(以下「検討会」という。)の審議事項である「採血基準見直しの検討」について、以下(1)～(6)に掲げた個別の見直し案等についてエビデンスの検証等を行い、安全に実施可能かどうかを検討する。

- (1) 400 mL 採血、成分採血の下限年齢の見直し
 - ・「18歳～」→「17歳～」又は「16歳～」と見直すべきか
- (2) 血小板成分採血の上限年齢の見直し
 - ・「～54歳」を引き上げるべきか
- (3) 採血基準項目の「血液比重又は血色素量」を「血色素量」に改められないか
- (4) 年間総採血量、年間採血回数、採血間隔を見直すべきか
 - ・400 mL の年間採血回数：「男性3回以内」→「男性4回以内」など
- (5) 男性の血色素量最低値を見直すべきか
 - ・現行の「12.5g/dL 以上」→「13.0g/dL 以上」など
- (6) 未成年者のインフォームドコンセント、ドナーの安全対策についてどう考えるか
(海外との比較を念頭に)
- (7) その他見直しが必要な事項

2 組織及びメンバーの構成(メンバー構成・案は別紙)

- (1) ワーキンググループは、7～8人程度のメンバーで構成する。
- (2) ワーキンググループに座長を置く。
- (3) 座長は、会務を総理し、会を代表する。
- (4) ワーキンググループは、必要に応じ、関係者から意見を聴取することができる。
- (5) 検討会の委員及び厚生労働省医薬食品局血液対策課は、オブザーバーとしてワーキンググループに出席することができる。

3 ワーキンググループの運営

- (1) ワーキンググループの運営は、検討会からの要請により、(財)血液製剤調査機構が行う。
- (2) ワーキンググループの運営に関し必要な事項は、(財)血液製剤調査機構が座長と協議の上定める。また、検討結果は、検討会に報告し、了承を得るものとする。
- (3) ワーキンググループは、原則非公開で開催するものとする。

(別 紙)

「採血基準見直しの検討に係るワーキンググループ」メンバー(案)

No.	氏 名	現 職
1	宇都木 伸	東海大学法科大学院 実務法学研究科 教授
2	衛藤 隆	東京大学大学院 教育学研究科 教授
3	河原 和夫	東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科 教授
4	中島 一格	東京都赤十字血液センター 所長
○ 5	高本 滋	愛知医科大学医学部 輸血部 教授
6	半田 誠	慶應義塾大学医学部 輸血・細胞療法部 准教授
7	柴田 玲子	日本赤十字社血液事業本部 参事 製造管理課 採血係長

○: 座長

論 点 (案)

1. 社会や学校の環境変化に対応した献血推進方策

- ① 高校生献血のあり方
 - 献血体験に代わる有効な啓発手段は考えられないか
- ② 学校教育における啓発
- ③ 献血環境のあり方
 - 献血者の年齢層に対応した献血推進方策
 - 地域における献血のあり方
 - 献血バスの効率的な運用など地域の実情に合った献血実施方法
 - 問診・インフォームドコンセントのあり方
- ④ メディア等を活用した広報戦略のあり方
 - 若年層個人にアピールするなど年齢層・地域の特性に対応した広報戦略
 - 献血血液の使用状況の情報提供のあり方
- ⑤ 低比重者に対する対応
- ⑥ 200 mL 献血の今後のあり方

2. 採血基準の見直し

献血推進のための環境整備として以下の採血基準の見直しは考えられないか

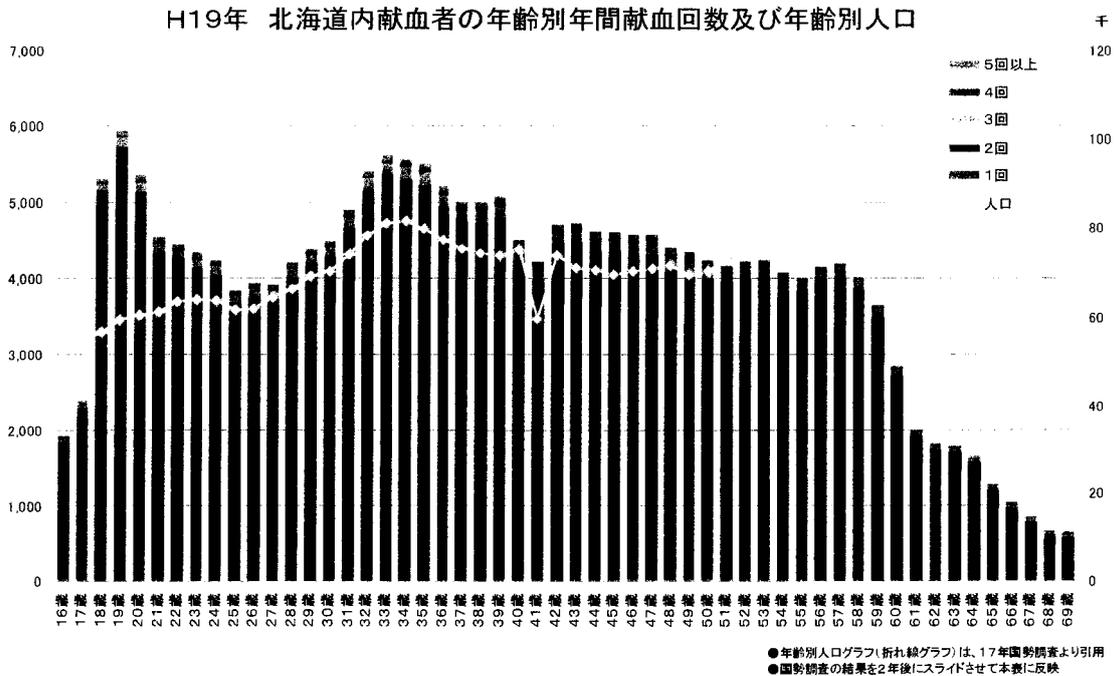
→ ワーキンググループを設置し、個別の見直し案についてエビデンスの検証等を行い、安全に施行可能かどうか等を検討

- ① 400 mL 採血、成分採血の下限年齢の見直し
 - ・ 「18歳～」→「17歳～」又は「16歳～」と見直すべきか
- ② 血小板成分採血の上限年齢の見直し
 - ・ 「～54歳」を引き上げるべきか
- ③ 採血基準項目の「血液比重又は血色素量」を「血色素量」に改められないか
- ④ 年間総採血量、年間採血回数、採血間隔の見直しについて
 - ・ 400 mL の年間採血回数：「男性3回以内」→「男性4回以内」など
- ⑤ 男性の血色素量最低値を見直すべきか
 - ・ 現行の「12.5 g/dL」→「13.0 g/dL」など
- ⑥ 未成年者のインフォームドコンセント、ドナーの安全対策についてどう考えるか(海外との比較を念頭に)
- ⑦ その他見直しが必要な事項

3. その他

- ① 注射時の「痛み」を和らげる方策
 - ・ 針を細くすることは不可能か
 - ・ 薬剤などにより痛みを和らげる方法はないか
- ② 今後の課題

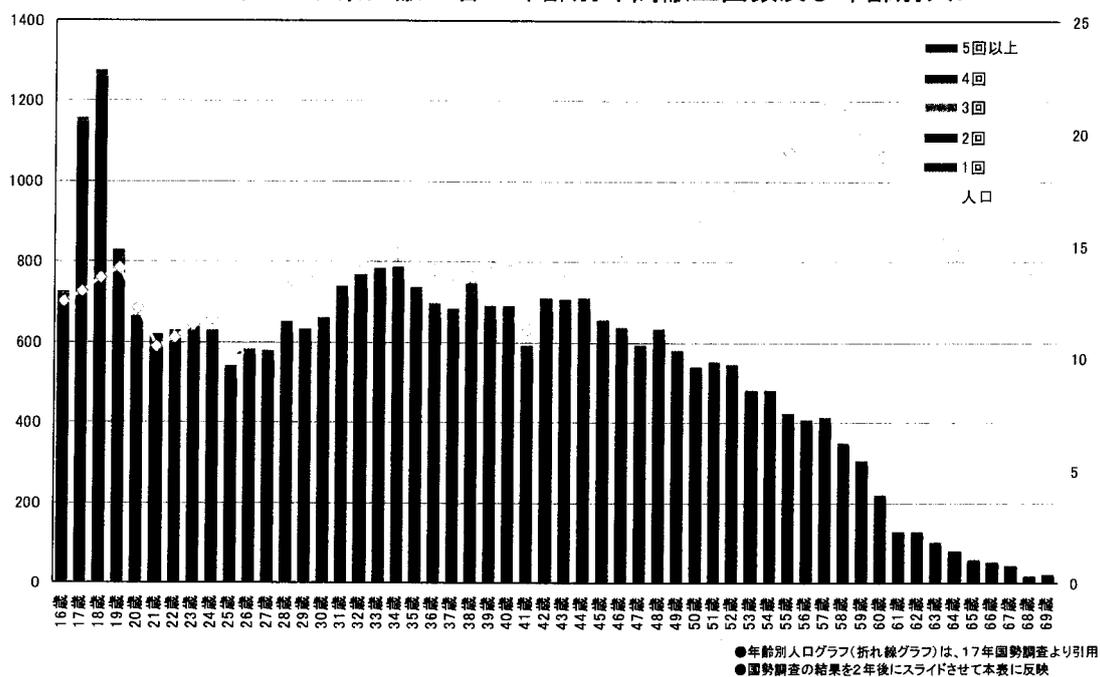
年齢別献血者実数（年間献血回数別）及び年齢別人口グラフ
【6都道府県抜粋】



● 実献血者数分布と人口分布の比較

18～20歳の人口分布と比較すると献血者分布が多い。50～58歳の人口は上昇しているが、献血者の分布はほぼ平行。

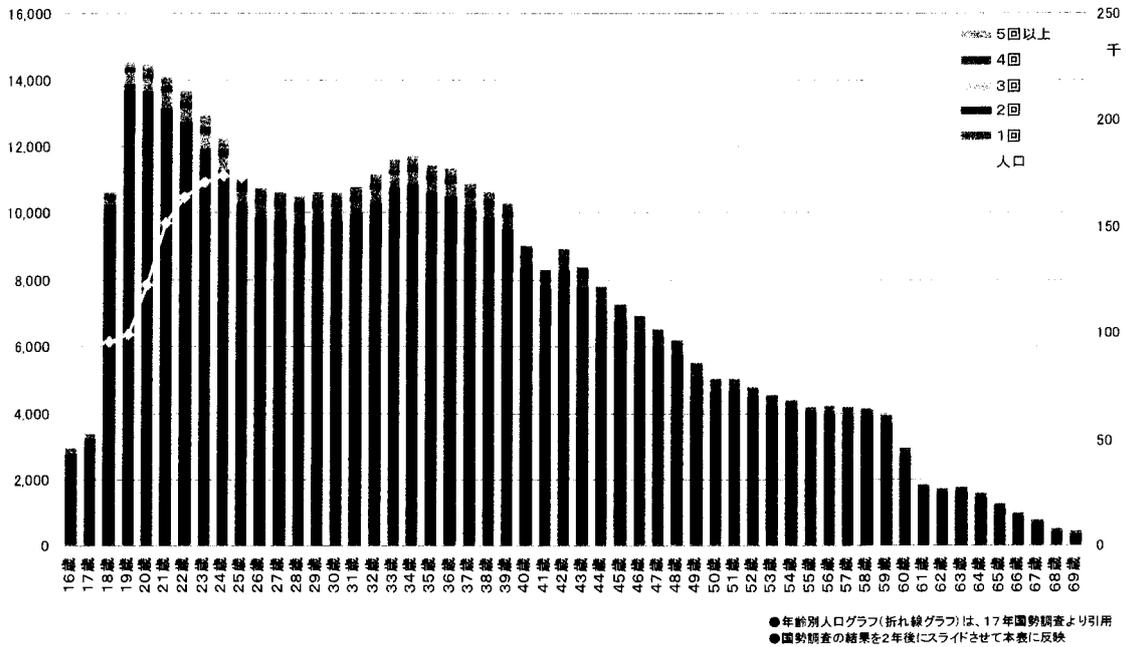
H19年 山形県内献血者の年齢別年間献血回数及び年齢別人口



● 実献血者数分布と人口分布の比較

17、18歳の人口分布と比較すると献血者分布が多い。43～57歳までの人口分布は緩やかに増加しているが、献血者分布は緩やかに減少。

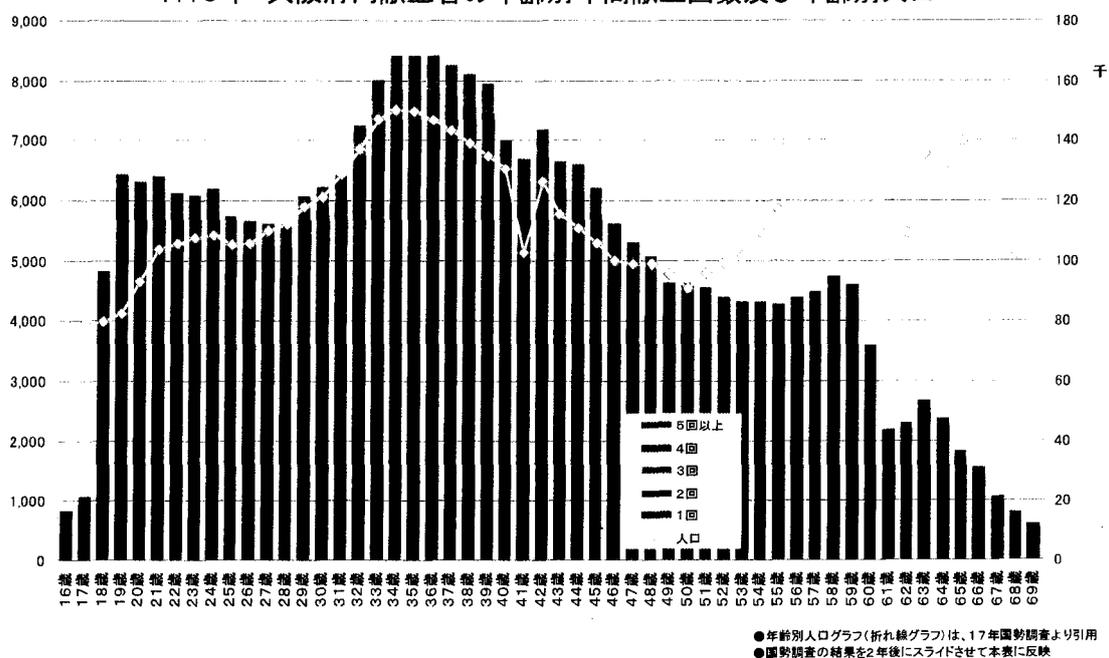
H19年 東京都内献血者の年齢別年間献血回数及び年齢別人口



● 実献血者数分布と人口分布の比較

30代前半と59歳前後に人口分布のピークがある。献血者分布は19歳をピークに減少し、30代前半に緩やかな第二のピークが見られてからほぼ減少し続ける。

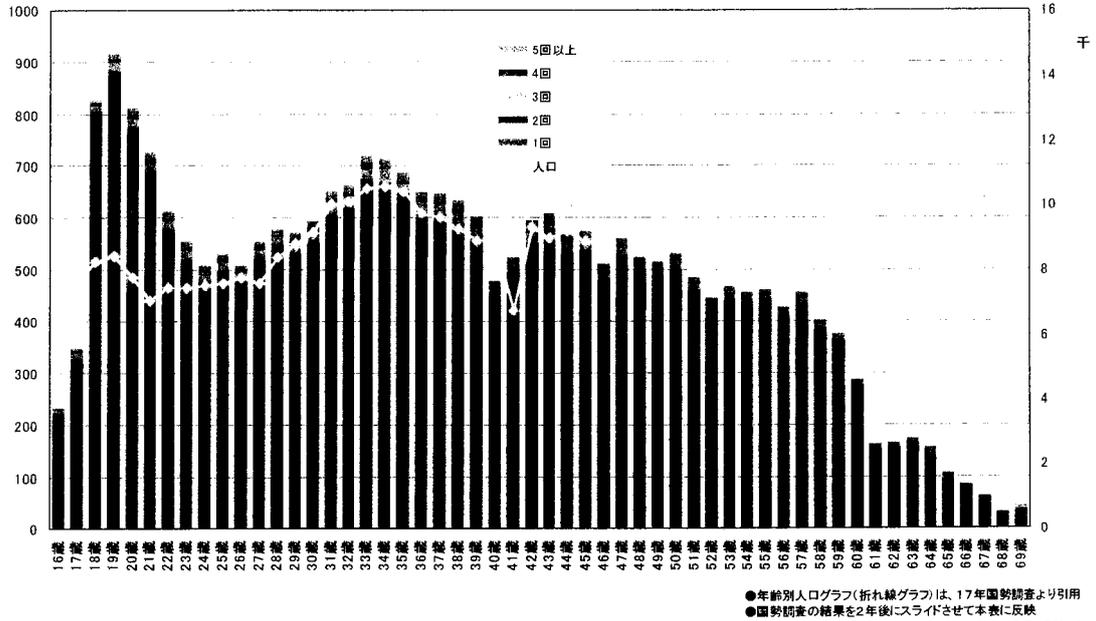
H19年 大阪府内献血者の年齢別年間献血回数及び年齢別人口



● 実献血者数分布と人口分布の比較

18～20歳の人口分布と比較すると献血者分布が多い。50～59歳の人口分布は上昇しているが、献血者分布は50～55歳まで緩やかに減少後、56～58歳までは緩やかに上昇している。

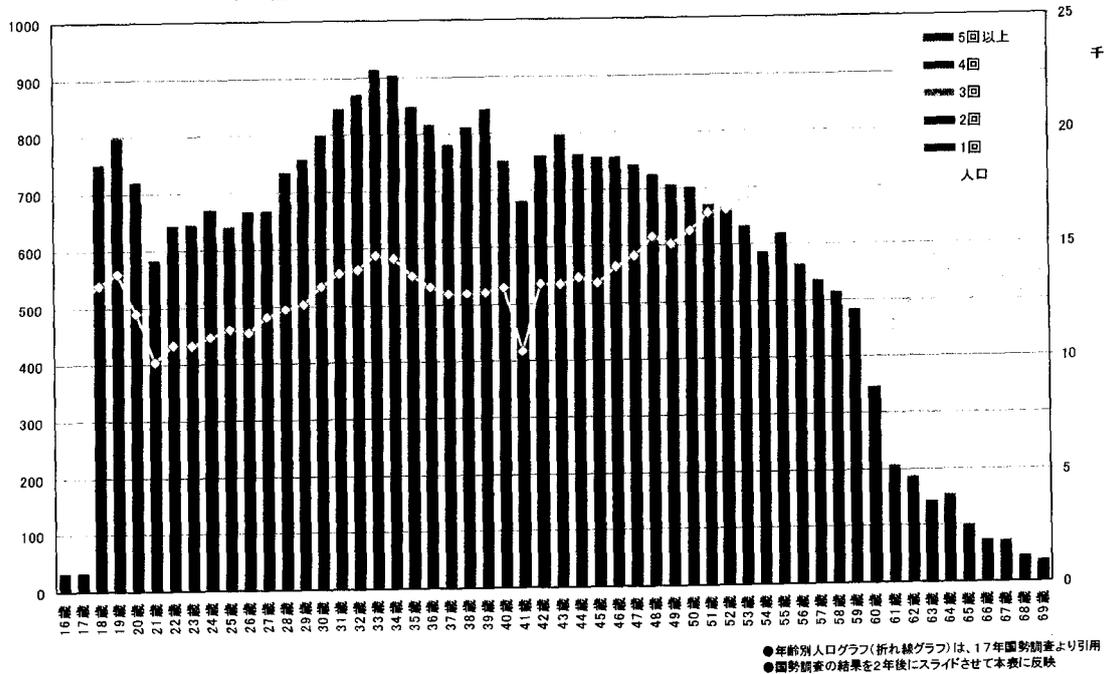
H19年 高知県内献血者の年齢別年間献血回数及び年齢別人口



● 実献血者数分布と人口分布の比較

18、19歳の人口分布と比較すると献血者分布が多い。49～57歳の人口分布はほぼ上昇しているが献血者分布は減少している。

H19年 宮崎県内献血者の年齢別年間献血回数及び年齢別人口



● 実献血者数分布と人口分布の比較

18、19歳の人口分布と比較すると献血者分布が多い。50～57歳の人口は上昇しているが、献血者の分布ほぼ減少している。

埼玉県における高校献血の実施状況

1 過去5年間の状況

- ・ 県教育委員会、血液センターの働きかけで、国公立高校における校内献血実施校は緩やかな増加傾向にある。
- ・ 知事と教育長からの校内献血推進の依頼を受け、校内献血の実施を計画的に学校行事に位置づけ、可能な学校の日程調整を県教育委員会、血液センターで調整をした。

		国公立高校	私立高校	計
平成 15 年度	実施校	46	32	78
	受付数	3,587	7,016	10,603
	献血数	2,850	5,510	8,360
	400ml	568	698	1,266
平成 16 年度	実施校	44	32	76
	受付数	3,583	6,947	10,530
	献血数	2,842	5,587	8,429
	400ml	683	544	1,227
平成 17 年度	実施校	45	34	79
	受付数	3,038	6,702	9,740
	献血数	2,374	5,397	7,771
	400ml	582	526	1,108
平成 18 年度	実施校	51	35	86
	受付数	4,404	5,428	9,832
	献血数	3,399	4,193	7,592
	400ml	409	730	1,139
平成 19 年度	実施校	82	35	117
	受付数	4,028	5,749	9,777
	献血数	2,938	4,286	7,224
	400ml	495	651	1,146

2 出前講座の生徒の感想等

- ・ 保健医療部薬務課と教育局保健体育課の連携により、「献血に関する出前講座」を実施している。
- ・ 19年度は、11校（小学校5校・中学校1校・高校5校）が授業や保健委員会活動などで実施した。
- ・ 血液疾患についての理解が深まった。献血をする前にお話を聞いてよかった。献血するのに不安が薄らいだ。などの「よかった」という感想が大半だった。

3 指導案（例）について

全学校に通知し、ホームページに掲載（別紙）

教保体第62号

平成19年4月11日

各県立高等学校長 様

埼玉県教育委員会教育長

高校生への「献血に関する指導案(例)」について(通知)

高校生献血の推進については、平成19年4月4日付け薬第12号で知事と連名で依協力を依頼したところです。

また、献血の重要性の普及啓発については、平成18年12月定例県議会において、「献血の重要性について保健体育の時間などを通じてきちんと時間を確保して教えるべきと考えるが、本県における現状と今後の取り組みについて伺いたい」との質問に対して、「今後は、献血の意義や重要性について、生命の相互扶助やボランティア活動の観点から、保健体育や特別活動の時間などで取り上げるよう働きかけてまいりたいと存じます。」と答弁し、また平成19年2月の予算特別委員会において「県立高校における献血の実施率は私立高校に比べて低いため、県立高校における献血の意義などに関する教育が必要と考えるが、今後の取組について伺いたい。」との質問に対して、「各高校に対し、保健体育の時間で、献血の意義や重要性についての意識を高めるため、具体的な指導のモデルを示して、積極的に取り組むように指導して参りたい。」と答弁しました。

これらのことを踏まえ、県教育委員会では、本年度、全ての県立高等学校の「保健体育科」の授業時間において「献血」に関して授業を行っていただけるよう、別添のとおり『高校生への「献血に関する指導案(例)」を作成しましたので、御活用くださるようお願いいたします。

担当；県立学校部保健体育課
健康教育担当 謝 村^{しゃむら}

TEL ; 048-830-6963

FAX ; 048-830-4971

Eメール ; a0146278@pref.saitama.lg.jp

高校生への「献血に関する指導案（例）」

平成 1 9 年 4 月

埼玉県教育委員会

保健体育科（科目保健）学習指導案

1 単元名 現代社会と健康 (エ) 様々な保健活動や対策 (献血の意義や重要性)

2 本時の学習と指導

(1) ねらい

- ・ 日本赤十字社の活動について、仲間の意見を聞いて、自分の考えをまとめたり発表したりできる。 【関心・意欲・態度】
- ・ 献血の基礎知識について、日常生活にあてはめて考えたり、資料をもとに、意義や必要性について調べたり、整理できる。 【思考・判断】
- ・ 行政や民間機関・国際機関などが行う様々な保健活動や対策について理解できる。 【知識・理解】
- ・ 献血は16歳から実施できることを理解できる。 【知識・理解】
- ・ 献血に協力してくれる若い人が減っていることが問題であり、献血は相互扶助（ボランティア）の精神で成り立っていることを理解できる。 【知識・理解】

(2) 準備 教科書、資料、ワークシート

(3) 展開

段 階	学 習 内 容 ・ 活 動	指 導 上 の 留 意 点 ○ ・ 評 価 規 準 ◆	評 価 方 法 ● 資 料 等 ◇
導 入 10 分	1 身近な健康診断について確認する。	○ 思いついたことを、自由に発表するようさせる。	◇ ワークシート
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <発問> みなさんが中学校や高校において受けてきた健康診断はどんなものがありましたか？ </div> <予想される生徒の反応> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> ・内科検診 ・身体測定 ・歯科検診 ・心臓検診 ・耳鼻科検診 </div>	○ 学校において実施されている各検診等は学校保健活動の一部であることを理解させる。	
	2 行政による保健活動について知る。	○ 学校保健活動以外の行政による保健活動にはどんなものがあるか理解させる。	
	<板書事項> わが国では、出生から高齢にいたるまでのライフステージやライフスタイルに対応したさまざまな保健活動がおこなわれている。 <ul style="list-style-type: none"> ● 母子保健活動（妊娠後～乳幼児期） ● 学校保健活動（幼稚園～高校・大学） ● 産業保健活動（労働者） ● 老人保健活動（70歳以上） ● 地域保健活動（地域住民） 		
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <発問> 他に、どんな保健活動があるか知っていますか。 </div>		
	3 民間機関や国際機関の保健活動について知る。	○ これらの保健活動は行政による活動であり、その他に民間機関として日本赤十	

・ 日常の生活を振り返り、気が付いたことを発表する。

字社やNGO（非政府組織）の活動が行われていることを理解させる。

- 国際機関としてはWHO（世界保健機関）やUNICEF（国連児童基金）やUNEP（国連環境計画）などの活動があることを知る。

<板書事項>

- 民間機関による保健活動 ・ 日本赤十字社 ・ NGO（非政府組織）
- 国際機関による保健活動 ・ WHO（世界保健機関）・ UNICEF（国連児童基金） ・ UNEP（国連環境計画）

4 日本赤十字社の活動内容について理解する。

- 自分の今までの知識をもとに、予想し、発表する。

<発問>

日本赤十字社は、どのような活動をしているか知っていますか。

展
開
37
分

○ 日本赤十字社の活動内容を知り、その中の血液事業の一環として献血が行われていることを理解させる。

- ◆ 日本赤十字社の活動について、仲間の意見を聞いて、自分の考えをまとめたり、発表しようとしている。

<板書事項>

【関心・意欲・態度】

《日本赤十字社の活動》

- ① 災害救護 ② 医療事業 ③ 国際活動 ④ 看護師等養成 ⑤ 血液事業
- ⑥ 講習普及事業 ⑦ 青少年赤十字（JRC） ⑧ 社会福祉事業

5 血液事業である献血の現状と課題について学習する。

・ 5～6人でのグループ学習

○ 血液事業として、献血を実施していることを説明する。

- あらかじめ決めたグループ（男女混合）に、すばやく席を移動させる。

<発問>

今、「献血」の一番大きな問題は何だと思いますか？

・ ブレインストーミングで意見を出させる。

<予想される生徒の反応>

- 血液が足りない
- 汚染された血液がある
- 献血をする人が少ない
- エイズ ○ 輸血

○ できるだけ多くの意見を出すよう伝える。

○ 机間指導により、意見があまりでないグループには直接アドバイスする。

- ◆ 献血に協力してくれる若い人が減っていることが今の大きな問題であることを知っている。

【知識・理解】

○ 時期によっては血液が不足することがあることを知らせる。

○ 献血が少なくなっている現状を知らせる。

- 教師の話聞く。（献血の意義について）

<教師の話>

血液は人工的に造ることができないものであり、病気や怪我で血液を必要としている人に血液を届けるためには、献血への協力が必要です。

◇ 献血者減少のグループ

● 発表の様子

<p>6 献血の基礎知識について学習する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 5～6人のグループ学習 ・ 教科書や資料をもとに次のことについて調べる。 (各グループ1項目) 	<p>○ 献血についての基礎的な事柄について理解させる。</p> <p>◆ 献血の基礎知識について、日常生活にあてはめて考えたり、資料をもとに、調べたり、整理している。【思考・判断】</p> <p>○ 学習が進まないグループには、資料を見るポイントを示す。</p>	<p>◇ 献血リーフレット</p> <p>● ワークシートの記述</p>
<p>7 学習したことをまとめ、発表する。</p> <p><調べる内容></p> <p>(1) 献血の種類について</p> <p>(2) 献血のできる年齢</p> <p>(3) 献血に必要な時間</p> <p>(4) 献血のできる場所</p>	<p>○ グループの発表に、その都度教師が必要事項を付け加えながら進める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 献血の種類には全血献血と成分献血があり、全血献血には 200ml 献血と 400ml 献血、成分献血には血漿成分献血と血小板成分献血がある。 ・ 献血には採血基準がある。 《採血基準》 ・ 200ml 献血 16歳から 男性 体重 45kg 以上 女性 体重 40kg 以上 ・ 400ml 献血 18歳から 男性女性とも体重 50kg 以上 ・ 成分献血 18歳から 男性 体重 45kg 以上 女性 体重 40kg 以上 ・ 比重 <p>◇ 献血は16歳から実施できることを知っている。【知識・理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 採血にかかる時間は、人によって違うが 200ml 献血、400ml 献血で 20分程度であり成分献血は採血量に応じて 40～90分程度である。 ・ 献血のできる場所は次の場所である。 <ol style="list-style-type: none"> ①献血ルーム 都市部を中心に交通の便の良いところがあり、献血者がリラックスできる設備が備わっている。 ②献血バス(街頭献血) スーパーや駅前など多くの人が集まる場所で献血の呼びかけを行う。 ③その他(事業所単位) 学校や会社単位で、その学校や会社にいる人を対象に臨時の献血会場とする。 <p>○ 本県には7箇所の献血ルームがあり、本校に最も近いのは〇〇駅にあることを教える。</p>	<p>● ワークシートの記述</p>

	<p>(5) 献血の手順</p> <p>(6) 献血後の注意事項</p> <p>○教師の話を書く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 献血をすることにより、その結果から自分の健康管理にも役立つことを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 献血は次のような手順で行われる。 <p>《献血の手順》</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 献血受付 ② 問診票の記入 ③ 血液比重測定、血液型事前判定、問診および血圧測定 ④ 献血 ⑤ 休憩 ⑥ 献血カードの受け取り <ul style="list-style-type: none"> ・ 採血中や採血後はまれにめまいや皮下出血などの副作用が発生することがあるので、献血をした後は、次の注意事項を守るように理解させる <p>《注意事項》</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 献血当日は、激しいスポーツを避けること ② 水分を十分に補給すること ③ 重いものを持ったり身体に力を入れないようにすること。 ④ 針の跡をもんだり、こすったりしないこと <p>さらに成人であれば</p> <ol style="list-style-type: none"> ⑤ 採血直後の飲酒は避けること ⑥ 自動車などの運転をする時は十分な休憩をとること など <p>○ 教師の体験や献血後の通知等の内容を伝え、献血についての理解を深めさせる。</p>	<p>資料</p>
<p>まとめ</p> <p>3分</p>	<p>8 健康の保持増進を図るために、日本赤十字社など民間の諸機関や国際機関などにより、様々が活動が行われていることを確認する。</p> <p>《教師のまとめの話》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 生涯を通じて健康な生活を送れるように、ライフステージやライフスタイルに応じて、様々な保健活動が行われています。 ・ また、血液は人工的に造ることができないもので、献血を通じて、みんなが健康な生活を送れるように、時には、自分が協力を求めたり、困っている人を助けることができます。 	<p>○ 様々な保健活動がヘルスプロモーションの考え方に基づいていることを理解させる。</p> <p>◆ 様々な保健活動が自分たちの健康の保持増進を図るために行われていることを知っている。 【知識・理解】</p> <p>○ 献血をとおして、助け合いの精神や命の大切さを考えさせるようにする。</p>	<p>◇ ワークシート</p> <p>● ワークシートの記述内容</p>

ワークシート（さまざまな保健活動や対策）

1年 組 番 _____

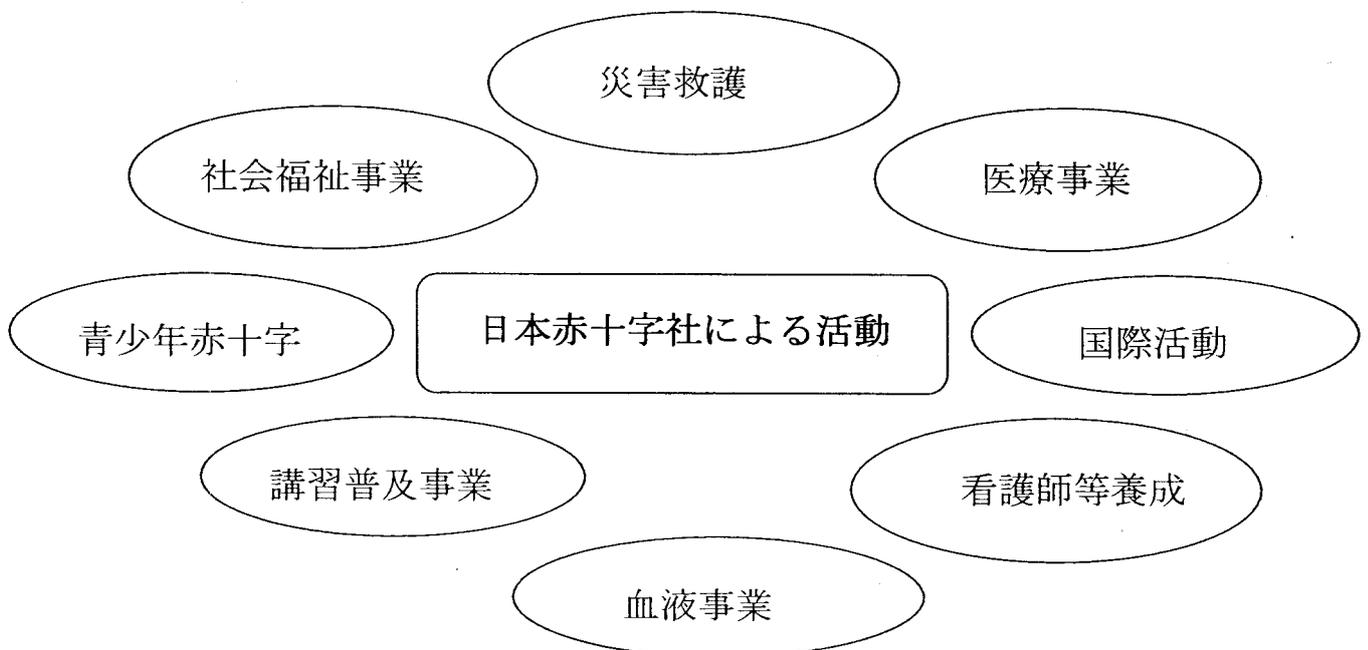
○ 私たちの身近なところで様々な保健活動がおこなわれている。

1 行政による保健活動

母子保健活動	(妊娠後～乳幼児期)
学校保健活動	(幼稚園～高校・大学)
産業保健活動	(労働者)
老人保健活動	(70歳以上)
地域保健活動	(地域住民)

2 民間機関による保健活動

(1) 日本赤十字社による活動



(2) NGO（非政府組織）による活動

人権・環境・平和などの諸問題に「非政府」「非営利」の立場で解決に取り組む民間組織

(3) 国際機関による活動

(ア) WHO (世界保健機関)

World Health Organizationの略
国際連合の活動のうち、保健衛生分野を担当している。感染症や薬物乱用の対策、健康教育の推進、衛生統計の作成、医薬品の供給など広い分野にわたって活動している。

(イ) UNICEF (国連児童基金)

第二次世界大戦の犠牲となった子どもの救済を目的として発足した。現在は、開発途上国の子どもの栄養改善や病気の子防のために活動している。

(ウ) UNEP (国連環境計画)

1972年に国連人間環境会議で決定・設立された「人間環境宣言」および「行動計画」を実施するための機関。地球環境問題の深刻化や活動も重要視され、オゾン層保護のウィーン条約策定をはじめ地球温暖化防止や有害廃棄物の越境移動問題でも中心的な活動をしている。

3 献血について

(1) 献血者の推移について

【資料1 年別（県及び全国）献血者数の状況】

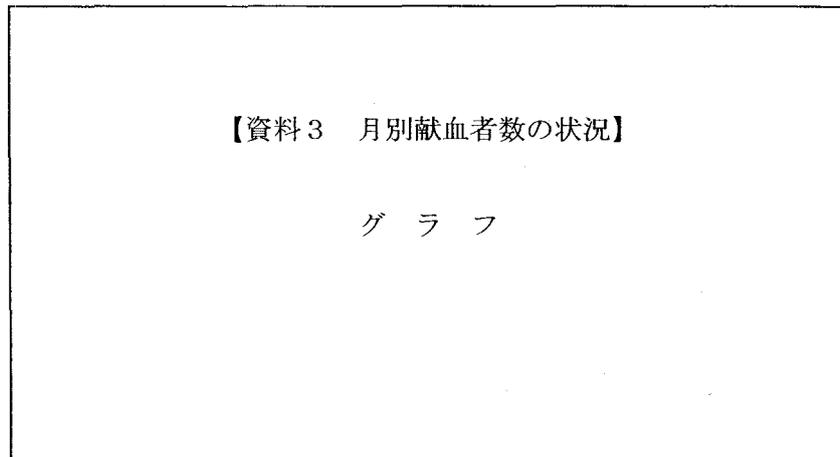
【資料2 年齢別献血者数の状況】

グ ラ フ

献血に協力してくれる若い人たちが減っていること。

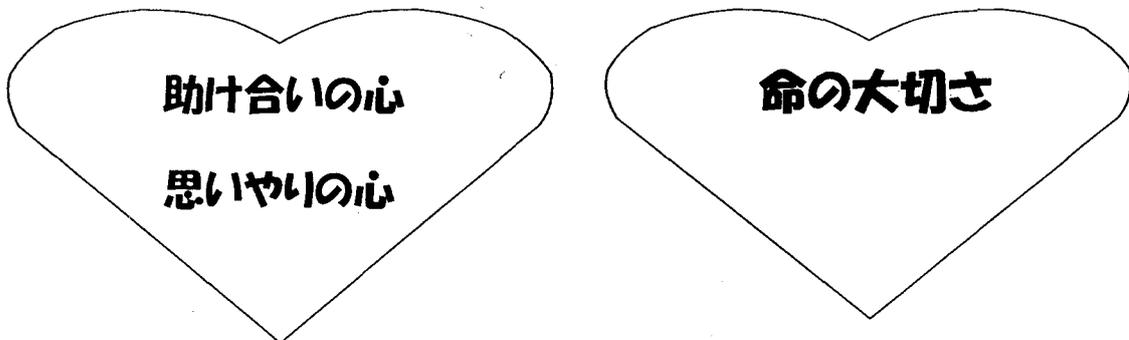
近年の献血者推移を見ても、歳以下の献血者が減少していることがわかる。

(2) 月別献血者数の状況について



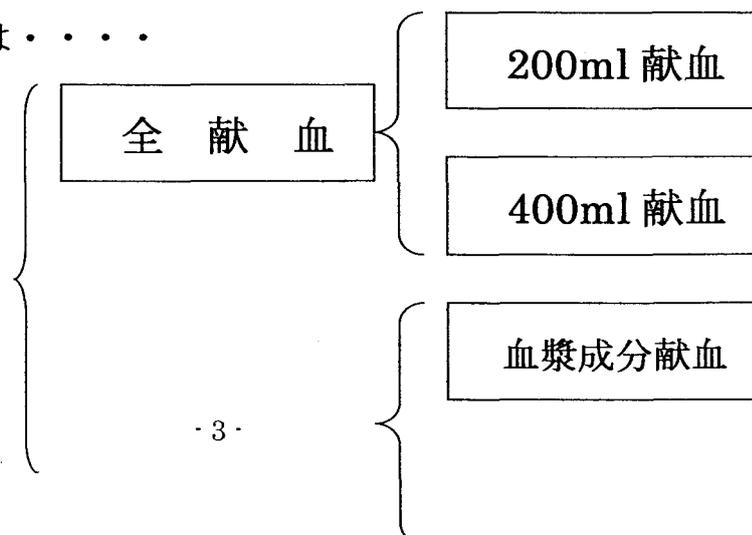
平成 年 月に血液が非常に少なくなった。
例年12月から3月にかけて、風邪の流行などにより献血者数が減少するため、輸血用血液が不足します。

血液は人工的にはつukれない



(3) 献血の基礎知識

●献血の種類は.....



成分献血

血小板成分献血

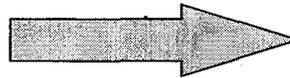
●献血のできる年齢は・・・

【採血基準の主なもの】

		200ml 献血	400ml 献血	成分献血
年 齢		<u>16歳から</u>	18歳から	18歳から
体 重	男	45kg以上	50kg以上	45kg以上
	女	40kg以上		40kg以上

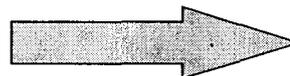
●採血にかかる時間は（人によって個人差がある）・・・

○200ml 献血・400ml



20分程度

○成分献血



40～90分程度

●献血のできる場所は・・・

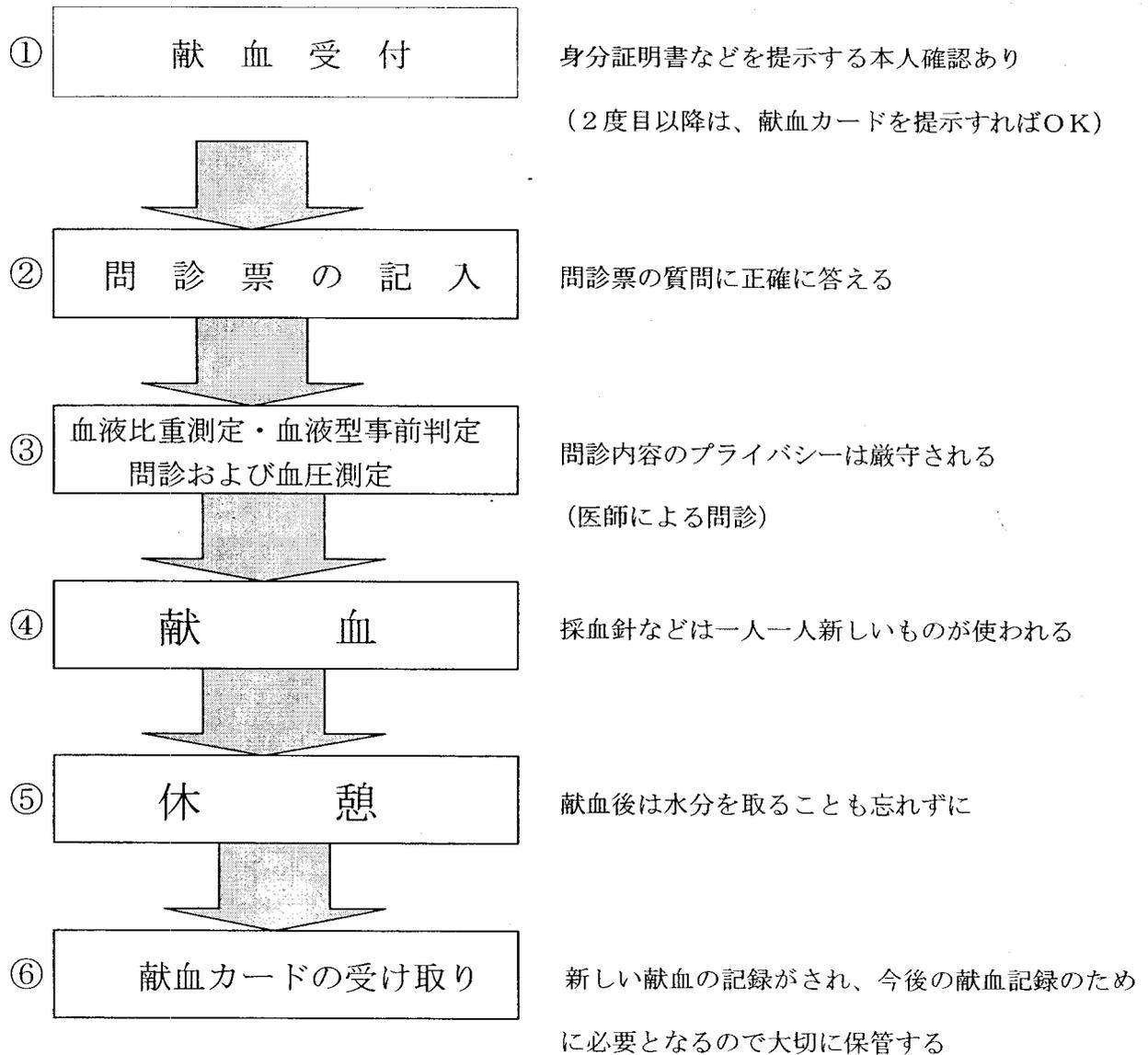
献血ルーム

都市部を中心に交通の便のよいところにあり、献血者がリラックスできる設備が備わっている。本校の最寄りの献血ルーム→（ 駅 ）

献血バス

多くの人が集まる場所。（学校や会社、スーパー店頭、駅前など）

● 献血の手順は・・・



● 献血後の注意事項

- ① 献血当日は激しいスポーツは避けること
 - ② 水分を十分に補給すること
 - ③ 重いものを持ったり、身体に力を入れすぎないようにすること
 - ④ 針の跡をもんだり、こすったりしないこと
- 成人であれば・・・
- ⑤ 採血直後の飲酒は避けること
 - ⑥ 自動車などの運転をする時は十分な休憩をとること

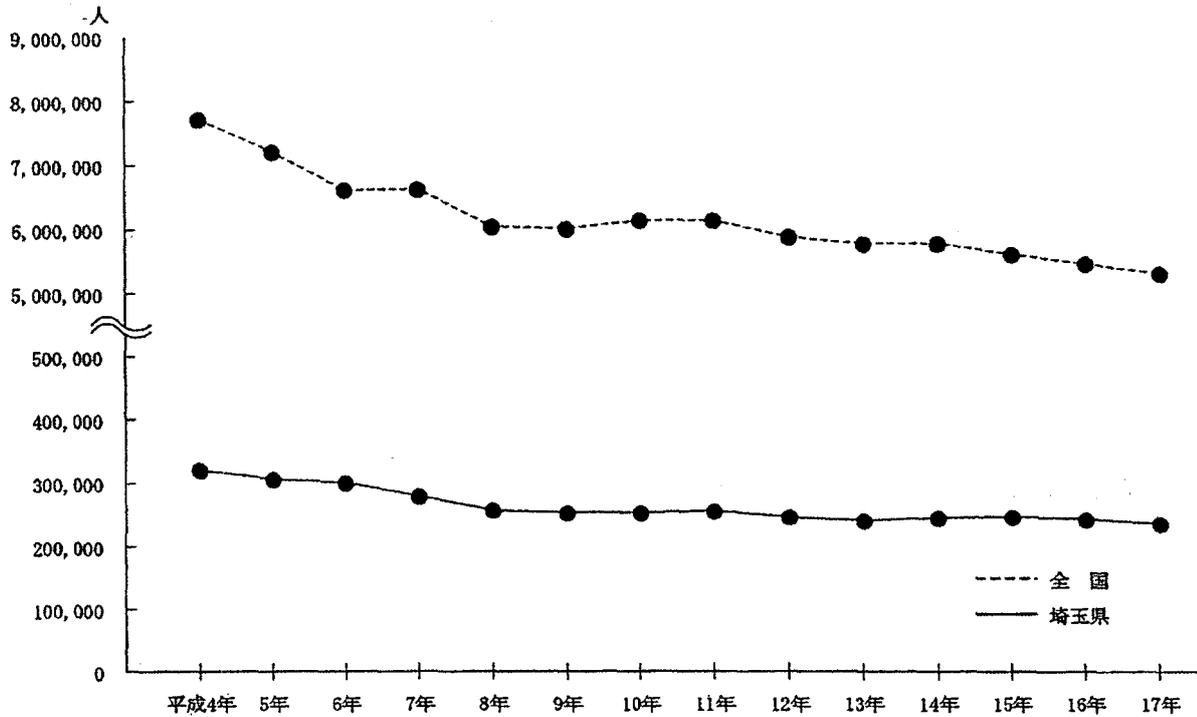
<なぜ献血が必要なのか。まとめましょう。>

--

資料1: 年別(県及び全国)献血者数の状況

埼玉県の献血者の総数は減少傾向にあります。昭和61年度から導入された400mL献血・成分献血を推進したことにより、400mL献血・成分献血の献血者数の割合は順調に伸び、献血者全体の80%前後となっています。

また、全国においても同様の傾向にあります。



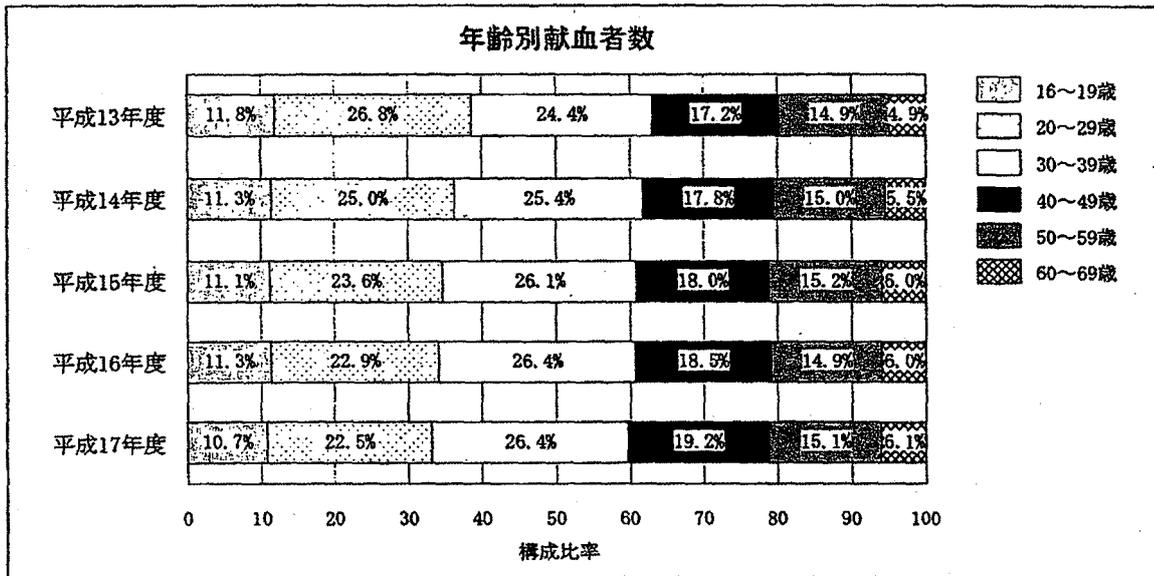
① 県及び全国の献血者数の推移

年	埼玉県		全国	
	献血者数(人)	対前年比(%)	献血者数(人)	対前年比(%)
平成4	319,035	94.4	7,710,693	95.2
5	305,123	95.6	7,205,514	93.4
6	299,295	98.1	6,610,484	91.7
7	279,926	93.5	6,298,706	95.2
8	256,296	91.6	6,039,394	95.9
9	252,330	98.5	5,998,760	99.3
10	252,348	100.0	6,137,378	102.3
11	255,410	101.2	6,139,205	100.0
12	245,303	96.0	5,877,971	95.7
13	240,860	98.2	5,774,269	98.2
14	244,667	98.2	5,784,101	98.2
15	246,326	100.7	5,621,096	97.2
16	243,470	98.8	5,473,140	97.4
17	236,221	97.0	5,320,602	97.2

資料2:年齢別献血者数の状況

埼玉県の年齢別献血者数を見ると、近年は20代の減少が著しく、一層、若年者層の確保対策の推進を図る必要があります。

また、献血可能年齢は、血小板成分献血を除き、平成11年4月1日以降、64歳から69歳までに引き上げられました。ただし、65歳以上の方については、健康上の理由から60～64歳の間に献血経験がある方に限られています。



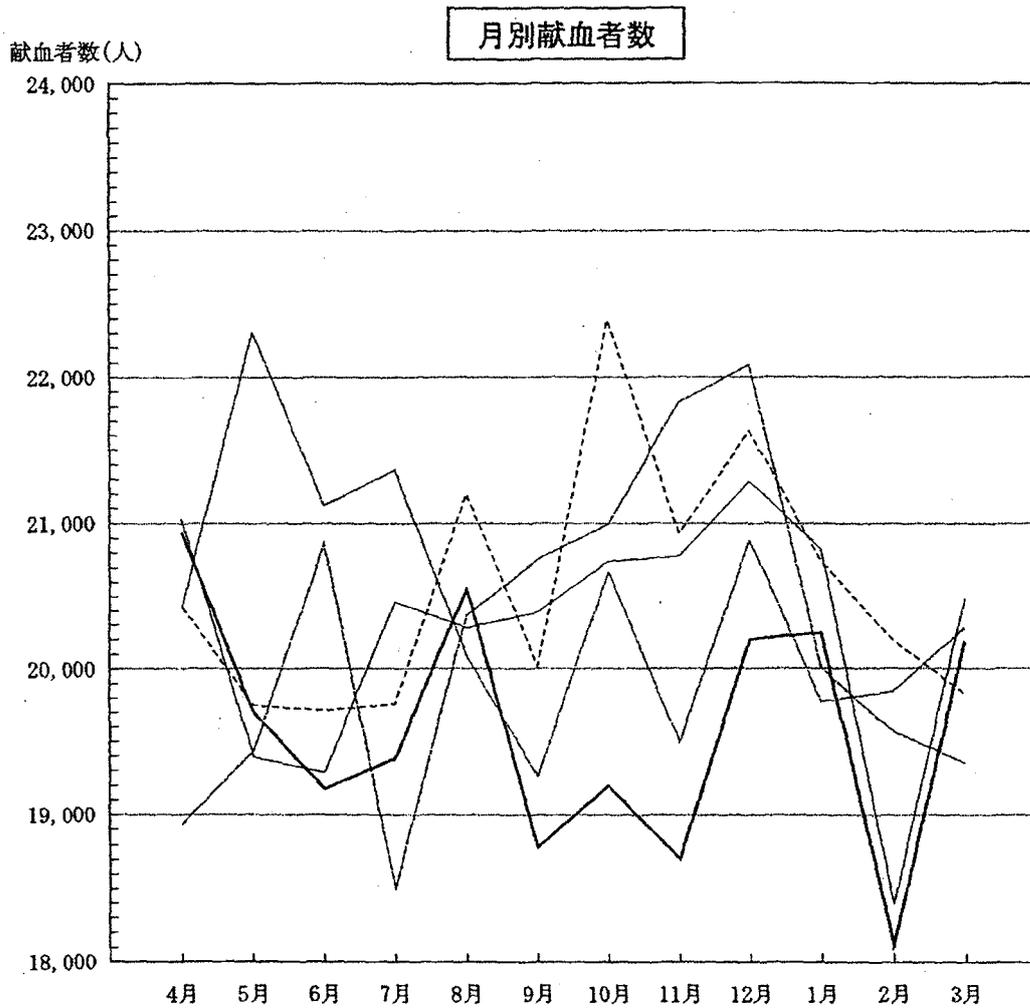
年齢別献血者数の推移

年度	方法別	16歳～19歳		20歳～29歳		30歳～39歳		40歳～49歳		50歳～59歳		60歳～69歳		合計	
		人数(人)	比率(%)												
13	計	28,635	11.8	65,072	26.8	59,285	24.4	41,601	17.2	36,192	14.9	11,819	4.9	242,604	100.0
	成分	5,660	6.6	28,346	32.8	22,046	25.5	14,130	16.4	11,283	13.1	4,824	5.6	86,289	100.0
	400mL	6,539	6.2	26,005	24.8	29,151	27.8	21,531	20.5	17,553	16.7	4,211	4.0	104,990	100.0
14	計	27,957	11.3	61,550	25.0	62,643	25.4	43,997	17.8	36,864	15.0	13,501	5.5	246,512	100.0
	成分	6,093	6.8	27,150	30.4	23,409	26.2	15,405	17.3	11,714	13.1	5,505	6.2	89,276	100.0
	400mL	6,629	6.0	25,267	22.9	31,307	28.3	23,152	21.0	18,766	17.0	5,286	4.8	110,407	100.0
15	計	27,215	11.1	57,988	23.6	64,138	26.1	44,230	18.0	37,273	15.2	14,614	6.0	245,458	100.0
	成分	5,702	6.7	24,770	29.1	22,921	26.9	15,032	17.6	11,297	13.2	5,570	6.5	86,292	100.0
	400mL	6,315	5.8	23,438	21.4	31,857	29.1	23,089	21.1	18,853	17.2	5,938	5.4	109,490	100.0
16	計	27,555	11.3	55,708	22.9	64,265	26.4	44,913	18.5	36,150	14.9	14,682	6.0	243,273	100.0
	成分	4,806	5.7	23,484	28.0	23,069	27.6	15,940	19.0	10,911	13.0	5,557	6.7	83,767	100.0
	400mL	6,545	6.0	22,638	20.9	31,708	29.2	22,866	21.1	18,551	17.1	6,118	5.7	108,426	100.0
17	計	25,179	10.7	52,546	22.5	62,115	26.4	45,240	19.2	35,584	15.1	14,406	6.1	235,070	100.0
	成分	3,235	4.4	19,772	26.7	21,016	28.4	15,415	20.8	9,883	13.3	4,798	6.4	74,119	100.0
	400mL	6,832	6.2	23,111	20.9	31,697	28.6	23,583	21.3	19,043	17.2	6,385	5.8	110,651	100.0
17	計	15,112	30.0	9,663	19.2	9,402	18.7	6,242	12.4	6,658	13.3	3,223	6.4	50,300	100.0
	成分	15,112	30.0	9,663	19.2	9,402	18.7	6,242	12.4	6,658	13.3	3,223	6.4	50,300	100.0
	400mL	15,112	30.0	9,663	19.2	9,402	18.7	6,242	12.4	6,658	13.3	3,223	6.4	50,300	100.0

資料3: 月別献血者数の状況

月別献血者数をみると、例年12月から3月にかけて、風邪の流行などにより献血者が減少するため、輸血用血液が不足します。

このため、12月1日から25日までクリスマス献血キャンペーンを実施し、さらに、1月1日から2月28日まではたちの献血キャンペーンを実施して、広く県民に献血を呼びかけました。



[単位 人]

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
— 平成13年度	18,923	19,429	20,853	18,492	20,364	20,747	20,988	21,825	22,083	19,998	19,558	19,344
---- 平成14年度	20,418	19,743	19,703	19,749	21,200	20,011	22,392	20,924	21,627	20,737	20,189	19,819
— 平成15年度	20,427	22,311	21,117	21,361	20,080	19,248	20,665	19,488	20,884	19,767	19,835	20,275
— 平成16年度	21,025	19,387	19,278	20,456	20,275	20,387	20,733	20,769	21,283	20,819	18,380	20,481
— 平成17年度	20,934	19,690	19,166	19,374	20,549	18,763	19,186	18,686	20,193	20,240	18,105	20,184

献血推進のあり方に関する検討会 中間報告(案)

1 社会や学校の環境変化に対応した献血推進方策

① 高校生献血のあり方

(献血体験に加え有効な啓発手段は考えられないか)

- ・ かつて200 mL 献血が主流であった時代に、高校における集団献血は安定的な献血源として積極的に推進されてきた。また、高校における集団献血は、実体験での「献血の入り口」として初回献血者の誘導に大きな役割を果たしてきたと考えられる。
- ・ しかしながら、学校週5日制の施行や医療需要の変化など、さまざまな環境変化により、以前のような集団献血を高校で実施することは難しくなっている。
- ・ 一方、高校時代における献血体験が献血者確保に効果をもたらし、その後の献血行動の動機付けともなることが意識調査の結果からもうかがえ、この年齢層に対する意識づけが重要であることを示唆している。
- ・ 集団献血を通じて、高校時代の献血体験をもつことが難しくなっている現在の状況から、献血体験に加え高校生への意識づけを行うための有効な啓発手段を早急に考えるべきである。
- ・ 具体的には、血液の専門家などが学校に赴き、献血の意義や仕組みをわかりやすく説明する「献血出前講座」や、体験学習などを積極的に行うことが有効ではないか。

② 学校教育における啓発

(学校の授業で「献血」を取り上げてもらうための戦略)

- ・ かつての集団献血に代わり、献血の意義と重要性を若年層に正しく伝えていくためには、学校の授業で「献血」について積極的に取り上げてもらうことが極めて重要である。
 - 高校・中学校の教科書などで「献血」を取り上げてもらうための積極的な取組が早急に必要である。
 - 小学生を対象とした取組についても、年代にあった啓発資材を開発するなど、一層力を注ぐべきである。
- (より幼少期の子どもを対象とした取組をどう考えていくのか)
 - ・ 絵本などのわかりやすい啓発資材を用いて、幼少期の子どもとともにその親たちにも「けんけつ」の意義をメッセージとして伝えるための取組を進めるべきである。

③ 献血環境のあり方

(献血者の年齢層により今後とるべき献血推進方策が異なるのではないか)

・ 18～22歳

多くの地域(特に都市部)において献血者の実数が最も多く、年齢別人口に占める献血者の率も高いと考えられる。この年齢層に対し、今後複数回献血者となってもらうための重点的な啓発・施策を実施すべきである。特に、初回献血時に、実際の献血血液の使われ方など、献血者の意識を高め今後の献血活動を促すことにつながる情報提供を丁寧に行うなどの対応が重要ではないか。

・ 23～29歳

多くの地域で献血者の実数が前後の世代に比べて少ない。都市部、地方ともにこの年代への効果的な啓発を重点的に行う必要がある。

なお、18～22歳で男性とほぼ同数を占めていた女性がこの年代で大きく減少する要因の1つとして、家庭に入ったり子育てに忙しいなどの理由も考えられることから、例えば、託児体制を備えた献血ルームを増加させるなどの取組みや、子育てを終えて献血に戻ってきてもらうための取組みも検討すべきではないか。

・ 30代前半

多くの地域で献血者の実数が多い。この年齢層の献血者に年間採血回数を増やしてもらうことが、血液量の安定的な確保につながると考えられる。

→ 都市部において、20歳代後半と同様に、30代前半の献血者の実数が少なく、年齢別人口に占める献血者の率も低い地域があることから、この年齢層を改めて献血に取り込むための方策も必要ではないか。

・ 40歳～59歳

都市部を中心にどの地域でも献血者の実数が少なく、年齢別人口に占める献血者の率も低い傾向。健康な40歳～59歳を改めて献血に取り込むための方策も検討すべきではないか。

・ 60歳以上

どの地域でも60歳を超えたところで献血者数が急激に減少している。この年代の人口そのものはどの地域でも多く、3～4年後にはいわゆる「団塊の世代」もこの年代に到達することになる。

減少の理由について、例えば定年退職したことにより献血をしなくなったことが主な理由なのであれば、健康な献血経験者については定年退職後も引き続き献血に協力していただくような啓発が必要ではないか。

(地域における献血のあり方)

- ・ 市町村合併の影響や地域コミュニティの変化、高齢化などにより、かつて地域に存在した「世話役」が不在となっている場合があり、以前よりも地域での献血が活発でなくなっている。
- ・ 地域での献血において自主的に一定の役割を担うボランティア団体の育成や活発に活動できる地域組織との連携が重要ではないか(欧米では地域の献血は実質、献血者側が組織したボランティアが担っている)。
- ・ ボランティアの育成や地域組織との連携については、欧米での実情なども参考とし、今後、行政や日本赤十字社が果たすべき役割や具体的な取組について引き続き検討を行う必要がある。
- ・ 献血への協力企業は着実に増加しているが、より多くの企業の協力を得るための努力や工夫が必要である。
- ・ 都市部、地方ともに官公署が率先して献血に参加すべきであり、その際には地域住民へも広まるように情報発信するなど、他の事業所に率先した取組が求められる。

(献血バスの効率的な運用など地域の実情に合った献血実施方法)

- ・ 日本赤十字社では、今後、献血血液の需給管理エリアを複数県単位で広域的に実施することを検討しているため、人口が集中する都市部では献血ルームによる献血受入れ、人口が分散している地区では地域を巡回する献血バスでの献血受入れといった役割分担がより明確化していくと思われる。
- ・ 地方においては、固定施設が少ないことから、献血バスをより一層効率的に運用することによって、効果を上げることがめざすべきである。
→ 欧州では、移動採血車は1カ所にとどまらず、1日に何カ所も効率よく移動する方法が一般的。わが国でも同様の運用方法により、効果をあげることができないか。

(問診・インフォームドコンセントのあり方)

- ・ わが国においては、献血を開始した当時から未成年者等からの採血の際、インフォームドコンセントを受けないまま現在に至っている(欧米では未成年についてインフォームドコンセントを受けた上で実施している)。
- ・ 今後のインフォームドコンセントのあり方について方向性を検討し、献血者や医療側などのコンセンサスを創っていくべき。
- ・ 献血の際の問診について、献血者が安心して献血に臨めるような工夫や今後の啓発につながる内容の検討が必要ではないか。

④ メディア等を活用した広報戦略のあり方

(若年層個人にアピールするなど年齢層・地域の特性に対応した広報戦略)

- ・ ターゲットとする年代層に即した広報媒体の選択が重要である。
- ・ 時代の背景を勘案し、インターネット、携帯サイト、ラジオFM放送などを媒体とした広報を積極的に行うべきである。また、音楽イベントなどのインパクトのある啓発を行うことは、特に献血未経験者の若年層に協力を呼びかける手段として有効と考えられる。
- ・ 一方で、献血血液は有効期限が短いという性質上、絶えず必要となることから、複数回献血への協力の呼びかけや、各地域において継続して献血に協力してもらえるようなキャンペーンを実施するなどの地道な啓発活動の継続も重要である。
- ・ 全国ネットなどのテレビCMによる広報は、影響力もあり、一時的には大きな効果が見込めるものの、多額の経費を要するなどの問題点がある。地域のケーブルテレビ局やFMコミュニティ放送局などその地域における有効な広報媒体を選択し、効果的な広報活動を行うことが重要である。

(献血血液の使用状況の情報提供のあり方)

- ・ 献血推進の広報にあたっては、輸血現場や血液製剤の投与を受けている患者側の映像や情報を効果的に取り入れ、献血することの意義をより具体的に感じとることができるような内容とすることが非常に有効であると考えられる。
- ・ 献血された血液が医療の現場でどのように使用されたのかがわかるような情報提供がなされれば、献血者が献血することの意義をより具体的に感じとれ、モチベーションを高めることができると思われる。このような仕組みを可能な範囲で検討していくべきである。
- ・ 一方、自らの体験から輸血や献血の重要性を強く感じている受血者(患者)も存在し、こうした方々の声を献血推進に活かす方策を検討する必要がある。併せて、受血者(患者)の横断的な組織が存在しないことから、どのように意見を把握し、反映していくかの検討も必要である。

⑤ 低比重者への対応

- ・ 低比重によって献血できなかった方は、平成19年に55万人を超える。こうした方々に対し、献血ルームで栄養指導を行うなどのサービスを行うことにより、再度献血へのご協力を促し、より多くの献血者の確保につなげる取組も重要である。
- ・ その他の理由により献血意欲はあるものの献血できなかった方のうち、今後献血の可能性が見込める方(献血予備軍)へのアプローチについても検討していくべきではないか。

⑥ 200 mL 献血の今後のあり方

- ・ 200 mL 献血については、近年、医療機関側の需要が大幅に減少したことにより、幼小児への輸血治療などに一定の需要はあるものの、その使い道は限定されている状況にある。今後、400 mL 献血の小分けでの対応などの技術的課題が解決されると、方向性としては400 mL 献血が一層推進されることが予測される。
- ・ しかしながら、平成19年の時点において、200 mL 献血の献血者数(延べ人数)は全体の11.8%を占めており、さらに400 mL 献血に不安があるために200 mL 献血にご協力いただいている献血者も存在することから、今後の200 mL 献血にどのように対処するかは、前述の学校教育における啓発の浸透状況や、献血環境の整備状況を踏まえて検討していくべきである。

2 採血基準の見直し

ワーキンググループを設置し、個別の見直し案についてエビデンスの検証等を行い、安全に施行可能かについて検討中。

3 今後の課題

今後、行政及び日本赤十字社が当検討会の報告を受け、どのように事業を進めていくかについて、短期的に実施可能なもの、中長期的に対応することが必要なものに分類・整理し、明確な目標を定めたアクションプランを作成し対応していく必要がある。